鳥になって下界を見下ろしたら そこにどんな世界が 広がっているのだろう

人 HITO

藤本一美さん
（鳥瞰図（ちょうかんず）の作画と収集）

大正の広重と称された吉田初三郎の原画を指さしながら「鳥瞰図の魅力は、誰にでもひと目でわかるというところですね。」と語る藤本さん。

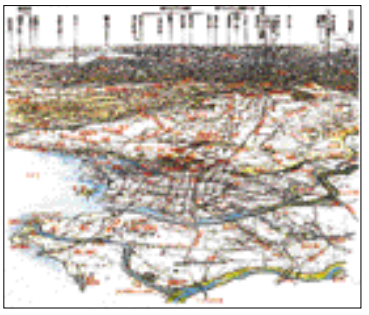
鳥瞰図（ちょうかんず）とは、鳥が空から地上を見た図と考えてよいのでしょうか、という質問に、「そのとおりです。瞰という字が難しいということで、観察の観という字を使う場合もあります。人間が空を飛んで、鳥になった気持ちで地図に表したものだと思います。」と答えてくれたのは、青柳にお住まいの藤本さん。現在、都立高校の地理の先生として勤務するかたわら、鳥瞰図の作画と収集に取り組んでいます。

初めは関東平野から見える山を、製図の技術と持ち前の絵心で精密に描く「地上虫瞰図（ちじょうちゅうかんず）」を描いていたそうですが、友人から借りた一枚の航空写真の素晴らしい景観に感動したのがきっかけで、鳥瞰図の作画に取り組み始めたそうです。大学で地理学専攻の藤本さんの作品は、地形の特徴をできるだけ表現しようと心掛け、少し強調したり、遠近感が出るような工夫をしています。

現在、30冊以上の書籍などに日本各地の鳥瞰図を掲載したり、行政からの依頼も受けています。さらに、全国のパノラマ都市景観図を描いて、各地域の市民や学生の勉強に役立ててもらおうと考えているそうです。

また、いろいろな人が描いた鳥瞰図を約3千点以上も収集したそうですが、特に好きなものは、最近、関西・名古屋圏を中心にブームを呼んでいる吉田初三郎の図だそうです。中心となる地域や建物の細部を正確に描きながら、遠くなるほど魚眼レンズで見たように、ぐにゃりと地形を曲げる独特の技法を使い、位置感覚をわかりやすく表現したり、遊び心がたっぷり詰め込まれていることなど、その優れた点を熱心に解説してくれました。

藤本さんの今後の夢は、と伺うと、「自分で鳥瞰図の博物館をつくりたいですね。」とにこやかに語ってくれました。



大東京パノラマ鳥瞰図
作画・藤本一美
（1962年当時の東京とその周辺）

植物・生き物／しょくぶつ・いきもの

さやまの生態系 Vol.54

ゴジュウカラ
（スズメ目ゴジュウカラ科）

全長14・5㎝。体の上面は青灰色で、首の横までのびる長い黒色の線が目立ちます。下面は白色で脇腹は橙色、くちばしは黒くてやや長く、足の指は比較的長くてつかむ力が強いのが特徴です。山地の林で繁殖し、冬はやや低いところに移りますが、まれに市街地の公園などにも来ることがあります。木の幹に縦にとまったり、頭を下にして逆立ちしたまま幹を下りたり、太い枝の下側を移動することができます。主に木の幹や、太い枝の樹皮につく昆虫やクモを捕食したり、カシ・シイなどの固い実やイチイ・カヤの実などを食べています。

撮影…県生態系保護協会狭山支部・矢内昭夫さん（水野）